




論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

①・乙	氏名	内藤 祐美	
学位論文名	Solving Social Problems in Aging Rural Japanese Communities: The Development and Sustainability of the Osekkai Conference as a Social Prescribing During the COVID-19 Pandemic		
学位論文審査委員	主査	牧石 徹也	
	副査	竹下 治男	
	副査	定金 敦子	

論文審査の結果の要旨

日本の地域社会において、地域住民の互助のつながりは重要なソーシャルキャピタルのひとつと、一般的に認識されている。こういった地域住民間のつながりによる取り組みの中には、組織的に発展し住民の健康基盤にコミットしているものも存在する。申請者は、医療のみでは解決困難な地域課題に取り組んでいる島根県の中山間地域で活動する「おせっかい会議」に着目し、会議体の設立、発展過程、取り組み内容、持続性について明らかにすることを目的に探索的研究を行った。この会議に継続して関わった住民の中から、支援を受けた人4名、支援を行った人4名、支援内容を企画した人4名の合計12名を選択し、2020年9月～12月にマンツーマンでの半構造化インタビューを実施した。インタビュー語録を録音し、書き起こした内容を用いた質的研究である。専門家を含めた3名と質的研究アプリケーションを用いて複数回の検討を行い、テーマを抽出した。その結果、①「設立への原動力」多様な組織体の連携構築など、②「軌道にのるまでの道のり」友好で肯定的な雰囲気の大切さなど、③「おせっかいの連鎖」参加の楽しさからうまれてくる自発性など、④「地域の変化」ソーシャルキャピタルとしての深化など、⑤「継続性への取り組み」世代間交流やコミュニティの複雑化増進などといった5つのテーマが抽出された。この結果から、おせっかい会議への参加が既存の繋がりを強化した新たなつながりを生み、地域のソーシャルキャピタルを拡張する可能性が示唆された。一方、高齢化率約40%で過疎化が急速に進む特定の一地域で行われた活動であること、インタビューに医療関係者が含まれていることなどの多くの限界が認められた。考察として、「おせっかい会議」の変遷は、地域主導型社会参加活動の形成過程に関する実践的枠組み例と考えることが出来る。今回の研究結果は、社会的処方や超高齢社会のソーシャルキャピタルの在り方といった観点から、地域全体のウェルビーイングに資する可能性があると考えられる。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

申請者は、島根県中山間地域で展開される「おせっかい会議」に着目し、その設立背景から発展過程、持続性に至る過程を質的研究により探索した。半構造化面接を通じて5つの主要テーマを抽出し、同会議への参加が地域のソーシャルキャピタルを強化・拡張し得る可能性を見出した。地域主導型社会参加の実践的枠組みを提示するものであり博士の学位授与に相応しい。（主査 牧石 徹也）

申請者はCOVID-19パンデミック下における高齢化が進む中山間地域でのおせっかい会議参加者へのインタビューから、このような会議参加が地域の社会課題への協働的対応を促進する可能性を実証した。関連領域の知識も豊富であり、博士の学位授与に値するものと判定する。（副査 竹下 治男）  
申請者は、診療を通じた地域との関わりの中で「おせっかい会議」を採知することとなり、会議の設立や発展に影響を及ぼした要因、継続性と関連する要因などを質的研究の手法を用いて明らかにした。研究手法や限界点を的確に理解したうえで、地域のソーシャルキャピタルについて広い視野から考察できており、研究者として今後の学術活動を発展させることが期待できる。（副査 定金 敦子）